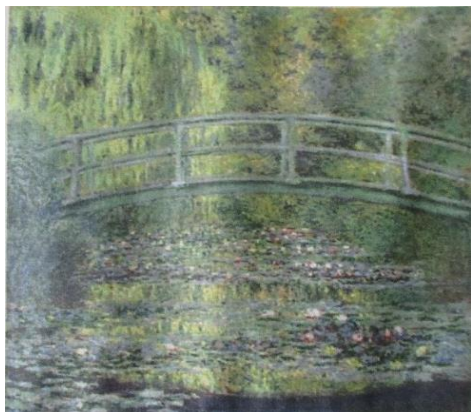
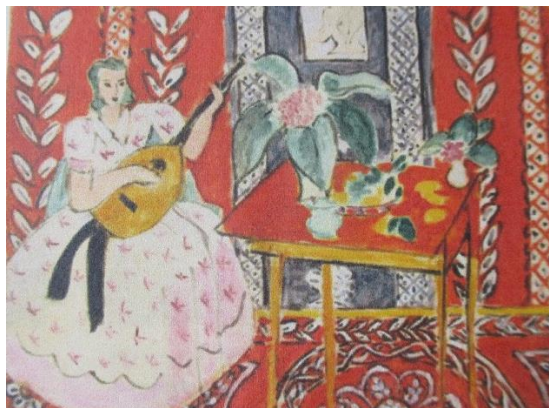


モネとマティス ーもうひとつの楽園

ポーラ美術館(箱根・仙石原) 2020.06.01~11.03



モネ 《睡蓮の池》 1899年



マティス 《リュート》 1943年

19～20 世紀にかけて、急速な近代化や度重なる戦争などの混乱した社会状況の中「ここではないどこか」への憧れが文学や芸術の中に現れてきたとされる。

なかでも「クロード・モネ」(1840～1926)と「アンリ・マティス」(1869～1954)は、庭や室内の空間を自らの思うままに構成し、現実社会の中にならば人工的な「楽園」を作り出した点において、深く通じ合う芸術家であるとされている。

「モネ」は、19 世紀末に近代化するパリを離れ、ジヴェルニーに住居を構えて、邸宅の庭に植物を育てて池を造成し理想の庭を造り上げ、そこに暮らしながら《睡蓮》を主題とした連作を精力的に制作したことで名高い画伯である。

一方「マティス」は、南仏に居を構えてテキスタイル(織物・布地)や調度品を自在に組み合わせ、室内を演劇の舞台さながら飾り立てて作品を制作し、こうしたモチーフは、南仏の明るい光と共にアトリエの作品を彩った画伯である。

このように「モネの庭」と「マティスの室内の楽園」は、欠くことの出来ない主題であると同時に、制作の場であり、さらに生きる環境でもあったとされる。

本展は、二人の画伯がいかにして「楽園」を創り上げ、作品と昇華させていったかを検証している催事である。

〈本展の見どころ〉

1. 印象派の「モネ」とフォーヴィスムの「マティス」の対照的な2人の画家に焦点を当てた初の展覧会である。
2. 国内21か所から二人の名品「約70点」が終結して展示されている。
3. 「モネ」生誕180周年に代表作「睡蓮」シリーズ7点が展示されている。
4. 日本で約10年ぶりに「マティスの大規模展」の開催である。